蒲 koh

月刊俳句誌

令和5年4月1日発行
（毎月1回1日発行）
第13巻第4号（通巻152号）

4月号

2023

魚は氷に

主宰作品

増成栗人

魚は氷に上り両界曼陀羅図

雨傘を杖に駆込寺の冬

そぞろ歩いて金縷梅の丘にゐる

更紗木瓜日差しも風も母の色

実朝の忌よ江ノ電が海へ出る

老人の漕ぐ一舟が海苔粗朶へ

佇めば冬かげろふの立つ湖畔

空缶をぽこんと蹴つて風生忌

湖に春展望台に春霞

雲一朶帰雁の空となりにけり

志賀直哉旧居に冬の蝸牛

一息に吹く百ほどの石鹸玉

釈迦逝きし日なり綿虫飛ぶ日なり

吊し雛

副主宰作品

谷口摩耶

子のピアノ聴いて来し日の水仙花

遠山の見ゆる窓辺の吊し雛

恩賜館の明治の屋根のあたたかし

飛石の歩幅に合はぬ春しぐれ

白梅の開きし空に目を凝らす

雪柳の絡まる枝をほどきやる

水撒けばふはりと香る春の土

白梅のしだるる枝の傘のごと

枝垂梅夕日に溶けてしまひさう

ぐんぐんと春満月の上りけり

三月になると雛祭の季語が目につきます。「雛飾る」「雛納む」など、昔を思い出して感傷的になったりもします。女の子は他家に嫁ぐことが前提になっているので、親の思いを強く感じます。雛祭の色彩は華やかでも気持ちが重いですね。吊し雛は雛段の周りの装飾ですが、元は江戸時代に雛人形の代わりに、庶民の暮らしの中で作られたのが始まりのようです。三月中旬まで新宿の京王プラザホテルは吊し雛でいっぱいです。

俳 作品抄

同人選

一呼吸置いての返事冬木の芽　佐藤あさ子

下町に生きて米寿の年の酒　守屋吉郎

初旅や戯画のうさぎに会ひにゆく　花本智美

歯応への良きはじかみやお元日　伊藤　隆

湯豆腐のことりことりと山に雪　祐　森司

かりがねに帰る時のありにけり　西條弘子

冬木の芽ほつと赤坂宿の雨　水谷はや子

七草に吉野の茶粥いただきぬ　松田那羅生

割烹着のゴム取り替へて久女の忌　伊藤真代

寒の雨喉を優しくしてをりぬ　水沢和世

練切の餡のさみどり春よ来い　守屋久江

選　増成栗人

さざなみの綺羅をつくして鳥の笛　横尾かんな

表札のやさしき書体石蕗の花　横山光榮

元旦にノアの方舟からの鳩　中島　宙

干柿を食めばむかしの空があり　山口民子

会員選

一月一日老人の弾くモーツァルト　江部　博

プリンターの前を離れず賀状刷る　後藤美帆

月ふたつ海に耀ふ寒さかな　山田ゆきこ

ワンサイズ小振りを選ぶ福達磨　村上栄子

全集も書架も古りたり冬座敷　菊池ひろ子

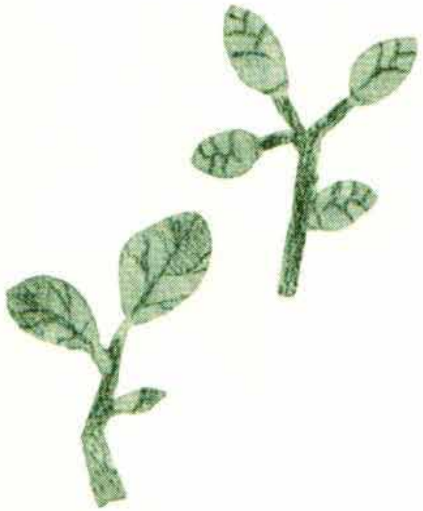
選　谷口摩耶

「芽」特集

「芽」とは植物の種子から最初に萌え出す茎、葉のことで、茎、葉などが未発達の状態にあるものをいう。生じる位置により、定芽・不定芽に、展開後の器官により、葉芽、花芽、混合芽に、また形成期などにより、夏芽、冬芽などに分けられる。

「芽を出す」「芽を摘む」などの用法があるほか、春の季語として、「木の芽和」「山椒の芽」「椿の芽」などがある。

筆噛めば木の芽起しの雨となる　栗人



俳句に詠まれた芽

荒井一代

木々おのおの名乗り出でたる木の芽かな　一茶

寒もそろそろ明ける頃、近くの欅の街路樹の枝先が心做しかうっすらと赤味を帯びてきているように見え明るい日差しの中で芽吹きが輝きを放つ。もうしばらくがとても待ち遠しく感じられる。

朝夕に雫のふとる木の芽かな　千代女
月の出とやゝへだたりて大樹の芽　原石鼎
老木の芽のいとけなき愛しさよ　富安風生
囁きあへる木々の芽や振り返る　石川桂郎
みどり子のまばたくたびに木の芽増え　飯田龍太

芽吹く時期も色合いも様々な木々、朝に夕に一日を紡ぐ作者のあたたかい目差が景を捉える。

耳聡くあり芽吹くもの枯るるもの　増成栗人
芽ぶかんとするしづけさの枝のさき　長谷川素逝
切かぶの芽立ちを見れば桜かな　去来
土塊を一つ動かし物芽出づ　高濱虚子
ほぐれんとして傾ける物芽かな　中村汀女
青もかち紫も勝つ物芽かな　中村草田男

静も動も小さな命の鼓動。確かな春の足音が聴こえてくるようである。

古川にこびりて芽を張る柳かな　芭蕉
咲かねばならず待たねばならず牡丹の芽　加藤楸邨
甘草の芽のとびとびのひとならび　高野素十
野いばらの芽ぐむに袖をとらへらる　水原秋櫻子
竹の芽も茜さしたる彼岸かな　芥川龍之介

移ろう自然の中で五感を特に刺激する春の目覚め。意識しなければ気付かぬ芽の存在は、生きとし生ける物そして万物に対する俳人の眼があればこそ数多く詠まれたことと実感する。

思い出すことみな愉し木の芽山　瀬戸内寂聴

寂庵の庭はゆかりのある人達からの寄進の一木一草が育ったものであったと聞く。四十何年も前の寂庵はまだ庭木の無い少し殺風景な印象として記憶に残っている。一年ごとに根を張り成長してきた落葉樹の淡く萌え出る芽は、庵主無き今年の春も静かに嵯峨野の風に包まれてやさしく揺れていることだろう

「芽」――特集

芽の一句

「芽」を詠んだ自分の俳句、または「芽」が詠まれた愛誦の句と、その句についてのエピソードや、俳句のなかでの「芽」について語っていただきました。

麓なる平群のくぬぎ芽吹きけり

吉田鴻司

相川　健

平群（へぐり）は古代の大和国平群郡平群郷の地。古代豪族平群氏の本拠地である。現在は奈良県平群町であり、町内には信貴山縁起絵巻で知られる信貴山朝護孫子寺がある。また、隣町の斑鳩町には法隆寺がある。

生駒山、信貴山を主体に、生駒山系は奈良県と大阪府との境界を成しているが、平群はまさにこれらの山々の麓の村である。

掲句は平成三年、作者が七十三歳のときの作である。作者は古代文化の香り濃きこの地に立ち、櫟の木々の芽吹きを目の当りにする。やさしい日の光を浴びて、木々はうす緑に輝いている。生きとし生けるものが動き出す喜びを感じるときである。

私は作者にお会いしたことはない。しかし、ベレー帽の似合う作者が、古代を想ひながら、芽吹きの喜びを実感している姿が目に浮かぶ。

ひた急ぐ犬に会ひけり木の芽道

中村草田男

青木まゆ美

私の子供の頃は、まだ野良犬や放し飼いの犬が歩いていたように思うが、最近はそんな風景も滅多にみられなくなった。

それでも、それぞれに個性豊かな犬との出会いと別れがあり、いつも家族であり続けた犬達との生活は、なつかしく楽しいものであった。

掲句は句集『長子』より。

春とはいえ、まだ少し寒さの残っている日差しの中、向こうから犬がまっすぐ歩いて来る。そして作者の横を通り過ぎて行った。「ひた急ぐ犬に会ひけり」と、まるで懐かしい人との出会いを楽しむかの様な表現である。又、芽吹きはじめた木々の中を足早に行く犬を見送る作者のやさしい眼差しを感じた。

芽木に凭る鉄工爪先まで睡る

吉田鴻司

原　達郎

掲句は昭和三十四年、鴻司師が一時町工場で鉄工生活をしていた時の作という。構内には樹木も少しあったのか、木に凭れて足を投げ出して熟睡するのはおそらく小年工であったろう。その少し前には「少年工冬も汗する襯衣（シャツ）赤し」「少年工のいたはる傷に冬日濃し」の句や、また少年工を叱らなければならなかった時の句もある、少年に向ける眼差しの暖かさと底に潜む哀愁を感じる。

学生時代、昭和三十五年夏、わずかな期間であったが羽田の鉄工所でアルバイトをしたことがある。社名は忘れたが、かなり大きな工場で高度成長の始まった日本の最前線の現場であった。衣服をとおして全身毛穴まで染まるような塗装作業で、自分の手足も見えない黒く濁った風呂に大勢の工員とともに入って帰るという日々であった。そしてその作業の要領を親切に指導し、ともに働いてくれたのは中卒の少年工であった。

あれから六十有余年、日本という国は変容し、生産現場の様相も変わったが、あの少年工はその後どのような人生を送ったのだろうかと折に触れて思うのである。

対岸や冬芽たしかに大辛夷

井竹日陶

西條弘子

対岸から見ても大きな辛夷の木は、しっかりと冬芽を蓄えて、春一番に咲く花時を夢見てこの寒さに耐えている。「冬芽たしかに」の中七がこの夢の大きさと人々の春への期待を物語っています。

作者が「河」の同人会長だった頃に同人の末席に加えていただいた私にこの句をお祝いに頂戴しました。平成九年二月五日とありますからずい分遠い昔となりました。

「芽」は、新しく生で発展しようとするもの、「冬芽」は、寒さを乗り越え春に生長する、と言うことで、力を蓄えて開花することを願っての先生の期待や、頑張れとの思いが込められていると思い、俳句を続ける上で大切な句の一つとなっています。

今もこの時の嬉しかった気持を忘れない様にと書棚に立て掛けてありますが、なかなか開花できないでいる私です。

椿の芽のはや棘をもつ性かなし

山口青邨

佐藤あさ子

椿の木は幹に葉に鋭い棘を満遍なく持ち「鳥とまらず」の別名がある。山のバターと称され、植物性の油脂や上質の蛋白質に富み、味もさることながら栄養価が高く　山菜の王者とも言われている。掲句、棘を持って生を享けてしまった椿の芽を、いとおしいと愛情を込めて称えているのだ。

春先お隣りさんから山菜を沢山頂くので　その時ばかりはせっせと天麩羅に精をだす私。

盛岡士族生まれの青邨。少年期を盛岡に過ごした青邨の「みちのく」は、常に心の故郷であり詩の源泉であった。質実で「みちのく人らしい」と言われる所以でしょう。

笈負うて少年仙台に蟻見つむ　青邨

小動植物を愛しユーモアは持ち味の一つとも。

冬の鵙この木に餌を思い出す　青邨

北上市に青邨の東京の住宅を移築復元した「雑草園」を見学した。句碑の傍らに黄色のかたばみの小花が、日を浴びていた時季であった。

ちょっとそこまで 第47回

「横浜⑤・鷗外と横浜」

鈴木　崇

「桟橋が長い長い。

四筋の軌道が縦に斜に切つてゐる鉄橋の梁に、長い桁と短い桁とが、子供のおもちゃにする木琴のやうにわたしてある。靴の踵や下駄の歯を噛みさうな桁の隙から、所々に白く日の光を反射してゐる黒い波が見える。

空は真蒼に晴れてゐる。」

森鷗外の短編小説「桟橋」の冒頭である。鷗外には珍しく（?）キャッチーな「桟橋が長い長い。」というフレーズは作中、随所でリフレインされ、印象派絵画のように明るい桟橋風景を描き出している。

明治四十三年三月五日の日記に「晴。亀井伯爵茲常、福羽子爵逸人の洋行を送りに横浜へゆく。」とあり、この事実をもとに書かれた小品である。

舞台となる横浜の港は、鷗外が明治十七年にドイツ留学へ出た場所でもある。二十有余年を経て、いかなる感慨があったのだろうか。

大さん橋ふ頭は、二〇〇二年、大さん橋国際客船ターミナルへと新装された。新ターミナルは、斬新でダイナミックな建築デザインが魅力だ。屋上は芝生広場となっており、客船の入出港やみなとみらいのスカイライソ、「キング・クイーン・ジャック」の三塔などを一望できる。

大さん橋の付け根から弓なりの防波堤が伸びている。その形状から「象の鼻」との愛称で親しまれている堤防だ。開港以来、高波を避けて荷物の積み下ろしが行われ、「イギジス波止場」とも呼ばれていた。

鷗外と横浜の関係といえば、鷗外は横浜市歌の作詞を手がけている。明治四十二年、開港五十年祭が行われ、市章と市歌が制定された。「桟橋」執筆の一年前だ。曲が先にできていて詞を乗せる、いわゆる〝曲先〟で作られた歌と言われている。

わが日の本は島国よ
朝日かがよう海に
連なりそばだつ島々なれば
あらゆる国より舟こそ通え

一番では日本を代表する開港都市を称揚する。

されば港の数多かれど
この横浜にまさるあらめや
むかし思えばとま屋の煙
ちらりほらりと立てりしところ

二番前半も港町を誇るのだが、続く「とま屋の煙」で一転して横浜の原風景を描き出す。粗末な苫葺きの小屋から立ちのぼる生活の煙。こういう描写に、さすが鷗外、と思う。

――

今日も大さん橋から客船が出てゆく。

「桟橋が長い長い。

今まで黒く塗つた船のゐた跡には、小さい波が白らけた日の光を反射して、魚の鱗のやうに輝いてゐる。」

サッカーを観るに時差なし燗の酒　流山　江部　博

兄逝きて十日凩吹く日なり

日の短益子の里の登窯

届きたる越前蟹を捌く朝

一月一日老人の弾くモーツァルト　名古屋　後藤美帆

ひとときをゲームに興じ小晦

十二月僧の車の走りゆく

プリンターの前を離れず賀状刷る

詣で来て凍えし指に息を吐く

夫を待つ七草粥に火を通し

冬ぬくし久しき旅は伊勢の杜　小樽　山田ゆきこ

寒晴の空に偽りなかりけり

今更に雪に匂ひのありにけり

月ふたつ海に耀ふ寒さかな

むらさきの気配残しで雪女郎

裸木やドッジボールの子等遊ぶ　豊川　村上栄子

廃屋の庭にびつしり仏の座

ワンサイズ小振りを選ぶ福達磨

群生の寺領の藪の実千両

鐘楼に中止の知らせ大晦日

栗庵閑話 58

虫丸

http://www.haisi.com/koh/index.htm